1 言ったこと以上に意味することもある (§8.1)

(1) 発話の意味＝文の意味＋語用論的な意味（＝文を具体的な状況で使うことにより生じる意味）

- 哲学者**ポール・グライス** (H. Paul Grice) は、語用論的な意味、とりわけ**会話の含意** (conversational implicature) がどのように生じるかを論じた。
- グライスは、会話の含意と区別されるべき意味として、**規約的含意** (conventional implicature) を指摘。
- ある文が使用されるときに観察される意味は、異なる種類の意味（伴立、規約的含意、前提、会話の含意、言語以外の要因による推論）が混ざりあったものである。
- 厳密な意味記述では、異なる種類の意味を判別する必要がある。

2 会話の含意 (§8.2)

(2) 直美： 市役所に行きたいんですけど、どこにあるかご存知ですか？
和江： **観光客なもので。**すみません。
a. 文字通りの意味：私は観光客だ
b. 含意された意味：私は市役所がどこにあるか知らない

(3) 会話の含意の特徴
a. 含意された内容は文字通りの意味（「**言われたこと**（what is said）」）とは異なる。
b. 話し手は聞き手が文字通りの意味も含意された内容も理解し、聞き手がそのような話し手の意図に気付いていると想定する。
c. 文脈に依存する。
d. **破棄できる** (defeasible)。すなわち、含意された内容は取り消したり、含意の発生を予防したりできる。

(4) 会話の含意の取り消し
直美： 市役所に行きたいんですけど、どこにあるかご存知ですか？
和江： **観光客なもので。**でも、さっき通り過ぎた新しい建物がそうだと思います。
a. 文字通りの意味：私は観光客だ
b. 含意された意味：~~私は市役所がどこにあるか知らない~~

3 グライスの会話の格率 (§8.3)

- 文字通りの意味と会話の含意の間の関係は恣意的なものではなく、かなりの程度、規則性がある。
- グライスは、会話の含意の発生の根本として、会話の協調的な性質を指摘した。
- 理解可能な会話を行うためには、話し手と聞き手は互いに相手が意味のあるやり方で

会話をしようとしているものだと想定しなければならない。

(5) **協調性の原理** (The Cooperative Principle)(Grice 1975:45)
会話への貢献は、その場面場面で、自らが関与するやりとりの中で受け入れられている目的や方向性から必要となるものをせよ。

(6) **会話の格率** (The Maxims of Conversation)(Grice 1975:45–46)

a. 質 (Quality)：真実であるような貢献に努めよ。
   1. 自らが偽であると信じることを言うな。
   2. 適切な証拠を欠くようなことを言うな。

b. 量 (Quantity)：
   1. （その時のやりとりの目的に）必要な情報量の貢献をせよ。
   2. 必要以上の情報量の貢献をするな。

c. 関係 (Relation) ／関連性 (Relevance)：関連性を持て。

d. 様態 (Manner)：明快であれ。
   1. 不明瞭な表現を避けよ。
   2. 曖昧性を避けよ。
   3. 簡潔であれ（不必要な冗長性を避けよ）。
   4. 順序正しくあれ。

- 語用論的推論は、話し手が格率に違反しているように見えるときに生じる。
- 聞き手は、話し手が協調的であり、話し手の発話を会話の格率に違反しないように理解しようとする。

パターン 1： 見かけ上の会話の格率違反。実際には違反はない。
例：(2) は、見かけ上、関係の格率 (6c) の違反。

(7) A: 喉が渇いたなぁ。
B: **あそこに自販機がありますよ。**
a. 文字通りの意味：あそこに自販機がある
b. 含意された意味：あなたはあそこにある自販機で飲み物を買って飲めば、喉の渇きが解消できる

パターン 2： 他の格率を守るための見かけ上の格率違反。

(8) A: C さんはどこに住んでいますか？
B: **フランス南部のどこかです。** (Grice 1975:51)
a. 文字通りの意味：C はフランス南部のどこかに住んでいる
b. 含意された意味：私は C がフランス南部のどこに住んでいるか、正確には知

らない

(i) A が求める情報量より少ない答え → 量の格率 (6b) に違反

(ii) だが、量の格率を守ろうとして、さらに情報を与えると、嘘を言う可能性が高くなる → 質の格率 (6a) に違反

パターン 3： 意図的に格率を**無視する** (flout)。

(9) ある教授が哲学教員の職に応募しようとしている学生のために推薦状を書いている：「関係者各位——X 氏の英語力は素晴らしく、チュートリアルの授業にもきちんと出席していた。以上。」(Grice 1975:52)
—量 (6b) と関係 (6c) の格率に違反。
⟹ 私には X を哲学教員として推薦するための理由として書くことがない

4 含意の種類 (§8.4)

4.1 一般化された会話の含意 (§8.4.1)

- 上で見た会話の含意は、**個別化された会話の含意** (particularized conversational implicature) で、具体的な発話の状況に依存する。
- 会話の含意には、発話の状況に依存せず、命題の種類に関係する推論もあり、**一般化された会話の含意** (generalized conversational implicature) と呼ばれる。
- 一般化された会話の含意も、(6) の会話の格率に従う。
- しかし、普通、格率の違反のようなものは伴わない。

(10) 彼女は彼に鍵を渡し、彼は扉を開けた。

a. 文字通りの意味：彼女は彼に鍵を渡した ∧ 彼は扉を開けた
（＝彼は扉を開けた ∧ 彼女は彼に鍵を渡した）

b. 含意された意味：彼女は彼に鍵を渡した。そして、その後、彼は扉を開けた。
cf. 様態の格率 (6d) [4]「順序正しくあれ。」

尺度含意

- 尺度 (scale) 上の中間点を表す表現は、論理的にはそれよりも上のレベルを否定はしない。
- しかし、それよりも上のレベルが偽であるというように解釈されることが多い。
- このような推論は、**尺度含意** (scalar implicature) と呼ばれる。

(11) 杜夫は試験で 50 点取った。

a. 文字通りの意味：「杜夫は試験で 50 点またはそれ以上取った」（50 点以上取った学生は、必ず 50 点は取れている）

b. 含意された意味：「杜夫は試験でちょうど 50 点取った；51 点以上は取れていない。」
—量の格率 (6b) により、51 点以上取ったならば、「50 点」でなく、その点数の表現を使うはず。

(12) a. 水が**温かい**。
含意：水は熱くはない
b. 私たちは親戚**かもしれない**。
含意：私たちが親戚であるというのは確実なことではない
c. 男の子たちの**何人か**がラグビーの試合を見に行った。
含意：男の子たち全員がラグビーの試合を見に行ったわけではない
d. 健は**ほとんど**の書類を持っている。
含意：健はすべての書類は持っていない

4.2 規約的含意 (§8.4.2)

- **規約的含意** (conventional implicature) は、文の主たる真理条件には影響を与えないものの、付随して生じる意味であるという点で、会話の含意と似ている。
- しかし、その意味は語や構文といった言語表現自体に起因するもので、発話の状況には全く依存しない。その点で伴立や前提に近い。

(13) ゆえに (therefore)
彼は言語学者だ。**ゆえに**、英語がペラペラだ。
a. 伴立：彼は言語学者だ ∧ 彼は英語がペラペラだ
b. 規約的含意：彼が英語がペラペラなのは、言語学者であることが理由だ

(14) しかし (but)
彼は言語学者だ。**しかし**、英語以外の外国語が話せない。
a. 伴立：彼は言語学者だ ∧ 英語以外の外国語が話せない
b. 規約的含意：言語学者であれば普通、英語以外の外国語が話せないなどということはない

(15) も (too)
私**も**去年パリにいました。
a. 伴立：私は去年パリにいた
b. 規約的含意：他にも去年パリにいた人がいる

(16) すら (even)
のび太で**すら**満点取ったんだぞ。
a. 伴立：のび太が満点を取った
b. 規約的含意：のび太は最も満点を取りそうにない人物の一人である

- 規約的含意を前提と区別できるか、区別すべきかについては議論となっている。

5 会話の含意を判別するための特徴 (§8.5)

- 会話の含意は**破棄できる** (defeasible)。すなわち、取り消しや否定が可能。
- 伴立は破棄できない。

(17) a. 「関係者各位——X 氏の英語力は素晴らしく、チュートリアルの授業にもきちんと出席していた。**そして、もちろん、哲学的議論においても非常に優れている。**以上。」(cf. (9))
含意：~~私には X を哲学教員として推薦するための理由として書くことがない~~
b. 健は**ほとんど**の書類を持っている。**というか、実は、すべての書類が彼のもとにある。**(cf. (12d))
含意：~~健はすべての書類は持っていない~~

(18) #健は蚊を殺したが、蚊は死ななかった。

- 会話の含意は**保留できる** (suspendable)。すなわち、話し手はその内容の真偽に明示的にコミットしないことを選択できる。
- 伴立では、話し手はその内容の真偽にコミットする。

(19) a. **仮に誰もが行ったとまではいかなくても**、男の子たちの**何人か**がラグビーの試合を見に行った。(cf. (12c))
含意：男の子たち全員がラグビーの試合を見に行ったわけではない
b. #**仮に誰も行かなかったとまではいかなくても**、男の子たちの**何人か**がラグビーの試合を見に行った。
伴立：男の子たちの中にラグビーの試合を見に行った子がいる

- 会話の含意は、(i) 発話の文字通りの意味、(ii) 協調の原理とその格率、(iii) 発話の状況、(iv) 背景知識、(v) やりとりの参加者に (i)–(iv) があり、互いにそれを了解しているということから**計算可能** (calculable)。
- ただし、複数の含意が生じることもある（**非決定的**である (indeterminate)）。
- 会話の含意は、言語表現の表す「意味」から生じる。よって、言語表現そのものから**分離可能** (detachable) で、同義の別表現でも同じ含意が得られる。（様態の格率 (6d) は例外）

(20) 健は**ほとんど／大半／大方／ほぼすべて**の書類を持っている。(cf. (12d))
含意：健はすべての書類は持っていない

- 会話の含意は、それを明示的に表現化することで、**補強できる** (reinforceable)(Sadock 1978:294)。
- 伴立で同じことをすると、余剰的になる。

(21) a. 男の子たちの**何人か**がサッカーの試合を見に行った。**だが、全員が行ったわけではない。**
含意：男の子たち全員がサッカーの試合を見に行ったわけではない
b. #男の子たちの**何人か**がサッカーの試合を見に行った。**だが、行った子がいる。**
伴立：男の子たちの中にサッカーの試合を見に行った子がいる

6 異なる種類の推論の見分け方 (§8.6)

- 表 1 の複数のテストを試してみるべき。

表 1 会話の含意、伴立、前提の判別基準

		伴立	会話の含意	前提
a.	取り消しできるか／破棄できるか	NO	YES	YES/NO
b.	保留できるか	NO	YES	YES/NO
c.	補強できるか	NO	YES	NO
d.	否定文・疑問文で保持されるか	NO	NO	YES

伴立

(22) 健は蚊を殺した。
推論：蚊は死んだ。
a. #健は蚊を殺したが、蚊は死ななかった。
b. #健は蚊を殺したが、蚊が死んだかどうか私は分からない。
c. ✓ 健は蚊を殺した。蚊は死んだ。（cf. #健は蚊を死ぬまで殺した。）
d. 健は蚊を殺したの？／健は蚊を殺さなかった。 $\not\Rightarrow$ 蚊は死んだ

会話の含意

(23) A: 喉が渇いたなぁ。
B: **あそこに自販機がありますよ。**(= (7))
推論：あなたはあそこにある自販機で飲み物を買って飲めば、喉の渇きが解消できる

a. あそこに自販機がありますよ。でも、残念ながら故障中で、飲み物は買えません。
b. あそこに自販機がありますよ。飲み物は買えるかどうかは、分かりませんが。
c. あそこに自販機がありますよ。飲み物を買って飲めば、喉の渇きが解消できますよ。
d. あそこに自販機がありますか？／あそこに自販機がありません。
$\not\Longrightarrow$ あなたはあそこにある自販機で飲み物を買って飲めば、喉の渇きが解消できる

前提

(24) 昇はカワウソの世話をするのをやめた。
推論：昇はカワウソの世話をしていた

a. #昇はカワウソの世話をするのをやめた。でも、昇はカワウソの世話をしていなかった。
b. ?#昇はカワウソの世話をするのをやめた。昇がカワウソの世話をしていたかどうかは、分かりませんが。
c. ?#昇はカワウソの世話をするのをやめた。昇はカワウソの世話をしていました。
d. 昇はカワウソの世話をするのをやめたの？／昇はカワウソの世話をするのをやめなかった。
$\Longrightarrow$ 昇はカワウソの世話をしていた

参考文献

Grice, H. Paul. 1975. Logic and conversation. In *Syntax and Semantics: Speech Acts*, ed. Peter Cole and Jerry L. Morgan, volume 3, 41–58. New York: Academic Press.

Sadock, Jerry. 1978. On testing for conversational implicature. In *Pragmatics*, ed. Peter Cole, number 9 in Syntax and Semantics, 281–297. New York: Academic Press.